様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　12 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20592396
研究課題名（和文）歯科検診を応用した施設入所被虐待児のセルフ・エスティーム啓発プログラム
研究課題名（英文）the effects of dental intervention for improving the self-esteem among institutionalized abused children
研究代表者
佐野　富子（SANO TOMIKO）
新潟大学・医歯学総合病院・助教
研究者番号：40323977

研究成果の概要（和文）：
被虐待児のセルフ・エスティーム（以下 SE:自尊感情）と口腔状態を把握するため、新潟県の某児童相談所に一時保護されている被虐待児を含む 2－15 歳の小児 65 名（男子 34 名、女子 31 名）を対象に調査を行った。
入所理由（重複あり）は、虐待 45 名、ドメスティックバイオレンス同伴児 20 名、養護 11 名、非行 7 名、不登校 2 名、その他 3 名であった。SE に回答できた入所児（7－15 歳）43 名の平均 SE 値は 59.16±14.54 で、対照群 102 名の平均 SE 値 73.92±16.81 と比べ有意に低い値を示した($p<0.01$)。歯科治療の必要な小児は 65 名中 35 名（54%）で、そのうち 24 名（69%）は被虐待児であり、被虐待児は歯科を受診していない傾向にあることが示唆された。退所前のアンケート調査では歯の大切さを肯定する者の割合が高く、被虐待児の健康指南力と SE の向上に歯科的関与の有用性が認められた。

研究成果の概要（英文）：
To investigate the effects of dental intervention on self-esteem, oral condition, and concern for oral health among abused children admitted to the children’s center. We examined 65 (34 boys, 31 girls; age range, 2-15 years) children’s oral condition and instructed tooth-brushing. Self-esteem was examined using Pope’s five-scale test of self-esteem for children. Before discharge, the children completed questionnaires about their concern for their oral health.
The reasons for admission were child abuse and neglect in 45 children, domestic violence against the mother in 20, nursing in 11, delinquency in 7, truancy in 2, and other reasons in 3. Mean self-esteem score was 59.16±14.54 in residents (n=43; age range, 7-15 years) and 73.92±16.81 in the outpatient control group (n=102), which was a statistically significant difference ($p<0.01$). Thirty-five of the 65 residents (54%) needed treatment for caries. Of these 35 residents, 24 (69%) were abused children and 11 (31%) were admitted due to other reasons. Although the abused children had low self-esteem, after dental intervention, positive answers regarding oral health were obtained. The present findings suggest that dental interventions might be effective for improving the self-esteem of abused children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：歯学・矯正・小児系歯学
キーワード：歯科検診、セルフ・エスティーム、被虐待児、Pope の子供用 5 領域自尊心尺度

１．研究開始当初の背景

近年、児童虐待、不登校、拒食症など小児の精神・心理状態に係る問題が社会的に大きく取り上げられ、社会的・経済的養育環境の影響が小児の口腔にも反映した状況がみられる。特に児童虐待は、齲蝕の多発傾向や未治療歯の問題、口腔外傷など我々小児歯科医と関係する領域が大きい。このような被虐待児の口腔状況の改善には、小児歯科医の積極的な関与とともに、本人の口腔ケアに対する自覚と日常的な取り組みが重要である。

セルフ・エスティーム（以下 SE:自尊感情）は、自分自身の自己概念の評価によって形成され、幼児期の両親の養育態度や、学童期には教師や仲間との相互作用を通じて形成されるといわれている。歯磨き習慣と SE との関連についての調査では、SE が高いほど歯磨きの頻度が高いという報告がある。しかしながら、被虐待児は、保護者からの身体的虐待やネグレクトなどにより、自分の存在感や自己を大切にする気持ちが弱く SE が低いといわれている。被虐待児は、保護者の健康に対する認識も低く、歯科医院における定期的な検診を受けていることはほとんどないため、口腔への関心も低いのが現状である。

２．研究の目的

一般に被虐待児のセルフ・エスティーム（SE）は低いとされ、歯科では、齲蝕多発傾向や口腔外傷などが問題とされている。また、SE と歯磨き行動には正の相関があるという報告もある。今回、被虐待児等を対象として歯科検診や口腔ケア・保健指導を行うことで、歯磨きの習慣化など生活習慣の改善や口腔を通じて身体や健康への関心を高めることにより、自己の大切さに気付いて SE の向上に寄与できるのではないかと考え本研究を行った。

３．研究の方法

新潟県の某児童相談所に一時保護されている被虐待児を含む小児 65 名(男子 34 名、女子 31 名）を対象とした（図１）。1 か月に 1～2 回定期的に相談所を訪問し、歯科検診、歯垢染色、ブラッシング指導、機械的歯面清掃を行い、齲蝕罹患状態、治療状況、プラークコントロールレコードなど口腔状態を記録した。

SE については、Pope による子供用 5 領域自尊心尺度(全般的・学業・身体・家族・社会・虚構尺度）について 60 問の質問票を作成し、さらに歯科に関する 10 問を追加して調査した。また、退所時に歯科に関するアンケート調査を実施した。

SE 値の対照群として、新潟大学医歯学総合病院小児歯科診療室を受診した小児 102 名(6－15 歳）のデータを用いた。

本研究は新潟大学歯学部倫理委員会および施設長の承認を得て実施し（承認番号：20-R27-08-09)、データ分析は個人が特定できないよう匿名化して行った。

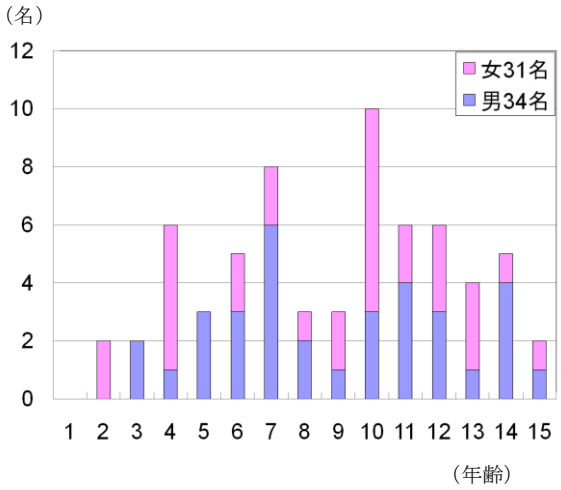

図１　対象者内訳

４．研究成果

入所児 65 名（2－15 歳）の入所理由（重複あり）は、虐待 45 名（身体的虐待 21 名、心理的虐待 14 名、性的虐待 2 名、ネグレクト 8 名)、ドメスティックバイオレンス同伴児 20 名、養護 11 名、非行 7 名、不登校 2 名、その他 3 名であった（表１）。

SE に回答できた入所児（7－15 歳）43 名の尺度別 SE の平均値を比較したところ、虚構尺度を除いて、全般的・学業・身体・家族・社会・歯科尺度で入所群の SE 値が有意に低かった($p<0.01$)。平均 SE 値は 59.16±14.54 で、対照群の平均 SE 値 73.92±16.81 と比べ有意に低い値を示した（表２、図２）。

歯科治療の必要な小児は 65 名中 35 名（54%）で、虐待ありで 62%、虐待なしで 42%の小児が未処置歯を有しており、被虐待児は歯科を受診していない傾向にあることが示唆された（図３）。

表１　入所理由（重複あり）

虐待		45 名
身体的虐待	(21 名)	
心理的虐待	(14 名)	
性的虐待	(2 名)	
ネグレクト	(8 名)	
養護		11 名
非行		7 名
不登校・閉じこもり		2 名
ドメスティックバイオレンス		20 名
その他		3 名
計		88 名

表２　ＳＥ結果

SE値	入所	対照
全般的尺度＊	9.14±3.24	11.90±3.74
学業尺度＊	9.26±3.58	12.38±4.12
身体尺度＊	8.88±2.89	10.97±3.74
家族尺度＊	9.93±4.37	14.39±3.84
社会尺度＊	11.35±4.05	14.25±3.66
虚構尺度	10.47±2.75	10.03±2.70
合　　計＊	59.16±14.54	73.92±16.81
歯科尺度＊	9.79±3.61	12.80±2.70

（＊：p<0.01）

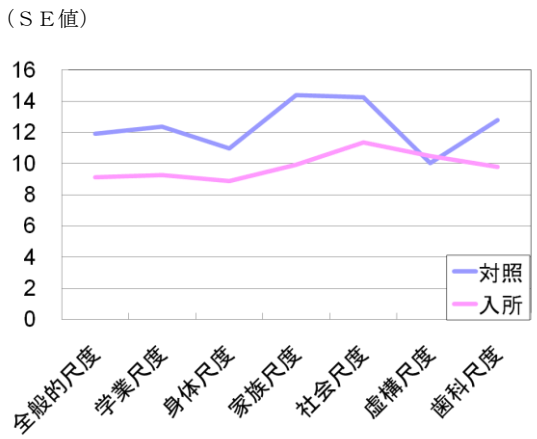

図２　ＳＥ結果

退所前のアンケート調査では歯を大切にしたい：87%（26/30 名）、歯を磨くと気持ちよい：73%（22/30 名）など口腔の清潔感や歯の大切さを肯定する者の割合が高かったことから、被虐待児の健康指南力と SE の向上に歯科的関与の有用性が認められた。

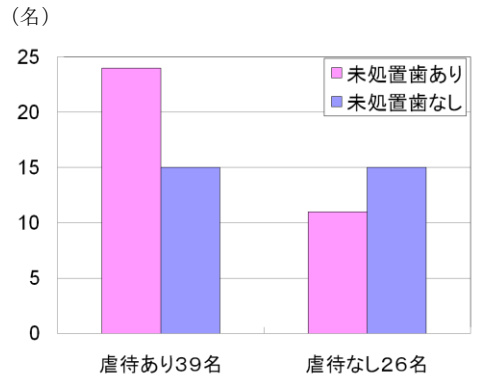

図３　未処置歯の有無

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①南部友貴、佐野富子、田口　洋、富沢美恵子：レストレイナーの使用状況による小児患者の歯科診療に対する適応性の変化．新潟歯学会誌、第 40 巻 2 号、2010、49-56.
②鈴木　昭、藤沢直子、水品きく枝、馬場菜緒、堀井愛子、笠井友治郎：裁判例にみる子ども虐待死過程の実証的研究. 子どもの虐待とネグレクト、査読あり、第 10 巻 1 号、2008、54-65.

〔学会発表〕（計 3 件）
①富沢美恵子、佐野富子、當摩紗衣、南部友貴、鈴木　昭：被虐待児のセルフ・エスティームと歯科的介入の効果. 平成 22 年度日本小児歯科学会秋季大会、2010. 12. 2、郡山.
②富沢美恵子、佐野富子、津田　高、當摩紗衣、南部友貴、鈴木　昭：施設入所被虐待児のセルフ・エスティームと歯科的関与の有効性について. 日本子ども虐待防止学会第 15 回学術集会埼玉大会、2009. 11. 28、埼玉.
③鈴木　昭：施設入所申立等裁判例にみる子ども虐待の実証的研究．日本子ども虐待防止学会第 14 回学術集会広島大会、2008. 12. 14、広島.

〔その他〕
①鈴木　昭：わたしたちのまちの「地域の子育て支援力」（福祉分野での取り組み）．子ども虐待防止推進全国フォーラム in　にいがた・妙高（厚生労働省）、第 1 分科会コーディネーター・分科会報告、2009. 11. 14-15.
新潟県内の市町村要保護児童対策地域協議会アドバイザー、虐待防止研修会、行政職員講習会等で、地域の要請に応え研究成果を

積極的に還元している。

６．研究組織

(1)研究代表者

佐野　富子（SANO TOMIKO）
新潟大学・医歯学総合病院・助教
研究者番号：40323977

富沢　美惠子（TOMIZAWA MIEKO）
新潟大学・医歯学系・教授
研究者番号：50107786

(2)研究分担者

鈴木　昭（SUZUKI AKIRA）
新潟大学・医歯学系・教授
研究者番号：30401756

(3)連携研究者

なし